

# 二松學舍 松菴會報



## CONTENTS

- P2 卒業生のみなさんへ
- P3 平成25年度ホームカミングデー
- P6 教壇を去られる先生方
- P8 松菴会各支部活動報告
- P14 同期会報告
- P15 文学賞受賞
- P16 卒業生の紹介
- P17 卒業生の活躍
- P19 在学生の活動紹介
- P19 地方の大学説明会
- P20 松菴会の歩み(2)
- P23 松菴会役員、支部長名簿
- P24 「論語の授業」の紹介・寄贈図書
- P24 寄付者紹介・編集後記 他

No.50  
2014年3月17日

# 平成25年度 卒業生のみなさんへ



二松學舍大学  
学長  
渡辺 和則



二松學舍松茶会  
会長  
神津 賢一郎

二松學舍大学キャンパスの東側に風光明媚な千鳥ヶ淵があります。濠の水面に桜の花びらが舞い降り、一面に浮かび、照り映える頃、皆さんは二松學舍大学に入学され、季節巡り、学業を終えて、さくらの蕾ふくらみ、まさに咲かんとする希望の春。この佳き日に卒業式を迎えたことは感無量の喜びであります。

筑雪の功なり、晴れて学士の学位を授与されました。心よりお慶び申しあげます。

さて、皆さんは二松學舍大学を卒業すると同時に、卒業生を以つて組織する同窓会である松茶会の一員になります。二松學舍卒業生が松茶会の名を冠してより、本年で八十二年

## 「壺中の天」を持ちましょう

ご卒業おめでとうございます。

きょうから皆さんは二松學舍大学の卒業生であると同時に、松茶会(二松學舍大学同窓会)の会員です。全国都道府県には松茶会支部があり、毎年定期的に支部総会が各地で開催されています。皆さんも地元の支部総会に積極的に出席してください。先輩たちと共にする一夕の話は、十一年の読書に勝ります。

皆さんが出た後は、先輩方が皆さんを引き立ててくださると同時に、本学の学問的伝統と社会での先輩方の活躍の実績が必ずや皆さんを励まし支えてくれることと思います。皆さんは、自信をもつて大学から社会に出てください。

になります。この間二万有余の会員が全国で活躍しています。同じ建学の精神のもと、同じ窓の中で学問に勤しんだ「ともがら」であります。二松學舍松茶会に新会員を迎え、多くの仲間が増えることは大変嬉しいことです。心より歓迎申し上げます。松茶会の役割は会員相互の励ましと、連帯を促していく活動と共に、母校二松學舍大学の発展、充実に寄与するという重要な役割を担っております。

ところで本学創立者三島中洲師は明治の欧風化のなか、あえて漢学塾を創立したということは、よほどの気概あつてのこと。その気概を示す師の書が掛軸として残されています。

私は、一日の長ある者として、皆さんに申し上げます。皆さんの今日あるのは、皆さんの努力に負うところが多いのは言うまでもないことです、皆さんと喜びを共にし、苦労を分かち合ってきた家族が陰になり陽になつて皆さんを助けたことを忘れてはなりません。今後は、皆さんが家族を支えていくのです。それができる人になってください。

古語に、「忙裏山看我 閑中我看山」(忙裏、山我ヲ看ル。閑中、我山ヲ看ル。)とあります。忙時でも、閑時でも、遠くの山は見えていきます。しかし目先の小事にとらわれ過ぎると、遠くの山は見えません。社会に出て間もない若い頃は、我が身のことでは精一杯で、周囲に心をくだく余裕が

になります。「自反而縮雖千萬人吾往矣」です。「自ら反みて縮くんば、千万人と雖も吾往かん」出典は『孟子』でよく知られている一節です。「良心に恥じるところがなければたとえ反対する者が千万人いたとしても、恐れずに向かって行こう。前途にどんな困難があつても、恐れひるむことなく堂々と自ら切り開いて行こうという気概のたとえ」。

ここに改めて取り上げたのは、本学卒業生門出に際し、はなむけの言葉として、まことにふさわしいと思つたからです。これから社会人として活躍される皆さん。どうかこの気概を持つて、堂々と自ら切り開いてください。

ありません。人間の器量は心の余裕から生まれます。仕事即人生という生活では心の余裕が失われます。仕事が終わつてからの時間の使い方が大事です。読書でも音楽でも絵画でも、およそ私たちの心を豊かにするもの、私たち自身が心から共鳴するものにふれることで心が耕されます。少しの時間でも構いません。それを毎日続けることが大事なのです。裕が養われる「壺中の天」となります。「壺中の天」を持ちましょう。

皆さんはいよいよ社会に出ることになりますが、呉々も健康に留意し、一隅を照らす器量の大きな人物になつてください。

# ホームカミングデー

平成25年11月2日

平成25年11月2日（土）14時30分から、  
第9回ホームカミングデー懇親会を開催。

全国から約160名の参加者が集まりました。  
本学のホームカミングデーは、卒業生の  
皆さんに、在学生の活躍する姿を知つて  
頂きたいとの思いから、一昨年度より創  
縁祭（大学学園祭）にあわせて実施して  
います。

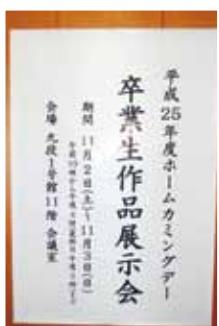
九段1号館の13階ファカルティ・ラウ  
ンジで行つた懇親会会場には、卒業後初  
めて大学を訪れた方もたくさんおり、近  
代的な大学の姿に驚いていました。神津  
賢一郎松苓会会长（文27回卒業）、渡辺和  
則学長の挨拶、野田恒雄常任理事の祝辞  
に続き、菅根順之名誉教授（文24回卒業）  
による乾杯の発声で始まった懇親会。先  
輩や後輩で輪になつたり、名誉教授や現  
職の大大学教職員を囲んで話し合つたりし  
て、和やかに懇談する姿が見られ、最後  
に、参加者全員で校歌を斉唱して散会し  
ました。

また、ホームカミングデーに併せ、11  
月2日と3日、九段1号館11階会議室を  
会場に開催した卒業生作品展には、書や  
写真などの力作35点の出品があり、多く  
の来場者で賑わいました。

会場には、旅館や会社を経営する卒業  
生の方々や多方面で活躍する卒業生の皆  
さんを紹介する、卒業生のパンフレット  
コーナーも設けました。たくさんの方に  
卒業生の会社や施設を利用していただき  
たいとの趣旨で始めたこのコーナー、来  
場者からはぜひ行ってみたいなどの声が  
寄せられました。



## ホームカミングデー



## ホームカミングデー



# 教壇を去られる先生方

長年にわたり、母校で教鞭をとられた文学部の大地武雄、酒井淳吉、林武志、吉崎一衛の四教授が、本年三月で定年を迎える。各教授とも在職中はゼミナールをはじめさまざまな機会をとおして学生指導に当り、指導を受けた卒業生は角界で活躍されています。長い間、母校のためご尽力を賜り有難うございました。

今回、各教授に定年を迎えるにあたっての思いを、ご寄稿願ったところ次の三名の教授から玉稿を頂きましたので掲載いたします。



## 定年退職を迎えて

大地 武雄

昭和五七年（一九八二）柏校舎開学とともに二松学舎大学に奉職して以来、三二年の歳月はあつという間に過ぎた感があります。

この間いろいろな事がありました。が、常に学生及び大学発展の為誠心誠意取り組んで来ました。柏校舎開学とともに、漢学の二松にふさわしいクラブ活動として全国大学唯一の漢詩研究会を創設し、漢詩作、合評

会、名詩鑑賞、合宿、大学祭での発表、『二松詩文』への投稿等を実施した。この実績が基となり、今西学長の時、全国学生生徒漢詩コンクール（漢詩の甲子園）が始まった。

中沢希男、赤塚忠先生の急逝により急速ゼミ担当と卒論指導を命ぜられた。その後教員になりたいゼミ生のために教員採用試験のための学習会を実施し、教員の夢を叶えること

が出来、ゼミ生とともに喜び合つたのもつい昨日のように思う。これが基になって教員採用試験合格講座が発足し今日に至っている。

一方、小学校に赴任した卒業生からレポートの提出、夏休み中のスクーリングの苦しみから、在学中に小学校教員の免許取得の道を切り開いてほしいとの願いから、今日玉川大学との特別協定による小学校教員免許取得の道を切り開くことが出来た。さらに、本学が多くの教員を教育界に送り出しているところから免許更新講習開催の要望が卒業生から寄せられ、今西学長の指示のもと開催す

ることになった。また、大学院に一年修了の国語教育プログラムによる専修免許状取得の道を開拓したのも学長の卒業生の便を考えてのことであつた。

最後に、良き学生、良き教職員に恵まれて大過なく退職を迎えることに衷心より感謝申し上げるとともに、本学の今後益々の発展を祈るばかりであります。

茨城大学教育学部卒、二松学舎大学院博士後期課程満期退学、二松学舎大学教授、大学院兼任、教育開発センター長、学務局長、二松詩文会同人、漢詩研究会顧問

## 定年を迎えるに当たつて

林 武志

ること数度に及び、最後は国文学科長二期勤めた。副学長は中途辞任である。

考えてみれば、二松学舎着任とともに東村山に居を構え、二松学舎を去る年に再び転居したのは、偶然とはいえ感慨深いものがある。東村山の在住期間はすべて二松学舎の在任期間であつたということである。東

村山転居後早々に妻を失い、鬱症状を発症したことは思いがけないことであつた。学生諸君が陰に陽に気にかけてくれたことも有り難いことであつた。

その後、連れ合いを求めるまでに十五年を要した。ゼミ生がよく東村山の自宅へ通い詰めてくれたのもその頃のことであつた。正味五、六年



## 定年を迎えるに当たつて

林 武志

ること数度に及び、最後は国文学科長二期勤めた。副学長は中途辞任である。

考えてみれば、二松学舎着任とともに東村山に居を構え、二松学舎を去る年に再び転居したのは、偶然とはいえ感慨深いものがある。東村山の在住期間はすべて二松学舎の在任期間であつたということである。東

①二松学舎大学大学院文学研究科修士課程（第一期生・文学修士）を経て、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程満期

②二松学舎大学着任年度 昭和五十二年四月一日（三十七年間）

③一年間に十幾つの委員会を勤め退学

であつたろうと思うが、あの頃は鬱く、口に出せないような状態であつた。

その期間も含めて、その後は二度の新カリキュラム編成に関わる仕事が長く続き、カリキュラム編成と同時に胃潰瘍・多発性胃潰瘍に悩む病時に胃潰瘍・多発性胃潰瘍に悩む病



## 定年退職に当たつて

吉崎 一衛

明治二十五年（一八九二）三月三日、二松學舎は、創立十五周年を迎えて、記念の宴を行つた。この宴席で三島中洲先生は、次の詩を作つてい

海内外回頭有幾囊  
海内外頭を回せば 縫囊か有る  
独修聖学諸生  
独り聖学を修めて 諸生を教ゆ  
譬如庭上二松樹  
譬如たり 庭上 二松の樹  
冒雪凌霜晚翠横  
雪を冒し霜を凌いで 晚翠横はる

この詩を二松學舎専門学校の初代校長、二松學舎名譽学長であった山田準先生は次のように訳している。

海内外に頭を回らして見渡せば、

この詩を二松學舎専門学校の初代校長、二松學舎名譽学長であった山田準先生は次のように訳している。

海内外に頭を回らして見渡せば、

魔が待ち受けていた。その間入試業務では、一人で近代の入試問題作成業務を行つていた。そうして、振り返つてみたら、もう定年が目の前に来ていたということが実感であった。

いつも笑いながらみていた部署々々の方々には言いようもないお

世話をかけた。最大の未練は、やはりより良い授業を最後までできたのだろうかという思いが頻りである。お別れするに当たつて、貫ける道を見誤つたと思ったら、熟考し、直ぐ様道を換えることである。

秋に獨り作者は漢土聖人の教、忠孝彝倫の道を講じ、國家有用の人材を養成する使命を体し、再三の苦境に遭逢し而も終に学舎を廢せず。偉業を今日に及ぼした。

さて、平成二十七年から、十八歳人口は減少期に入るといわれる。明治期と違つた意味で、大学も困難な時代を迎えることとなる。この時にはあたり、これからも皆様とともに松苓会員として協力していくきたい。

二松學舎大学文学部卒業  
二松學舎大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学  
日本放送協会学園高等学校をへて、昭和62年二松學舎大学に就任。二松學舎大学東アジア研究所長、二松學舎大学副学長、附属図書館長、教育開発センター長、国際交流センター長、学校法人二松學舎理事。全国漢文教育学会幹事。日本放送協会「古典（漢文）」放送講師

- 松苓会定期総会・幹事会 平成二十六年六月七日（土）※総会終了後懇親会を実施する予定です。
- ホームカミングデー 平成二十六年十一月二日（日）※卒業生作品展は例年どおり実施する予定です。作品の出品にご協力ください。

※二十六年度の招待期は、次のとおりです。同期会等の機会としてご利用ください。

昭和40年3月（33回卒）	昭和45年3月（38回卒）	昭和50年3月（43回卒）	昭和55年3月（48回卒）	昭和60年3月（53回卒）
平成2年3月（58回卒）	平成7年3月（63回卒）	平成12年3月（68回卒・政経6回卒）	平成17年3月（73回卒・政経11回卒）	平成22年3月（78回卒・政経16回卒）

※二松學舎大学学園祭が十一月一日から三日で開催されます。  
この機会に、在学生の活動をご覧ください。

## 松苓会からのお知らせ

平成二十六年度松苓会本部の主催する今後の行事の日程が決まりましたのでお知らせいたします。

# 松琴会各支部活動報告

（出席・参加者欄は敬称略）

## 秋田県支部

### ◆支部総会

支部長 三浦 基

平成25年8月31日（土）午後6時  
から、秋田駅前のホテルメトロポリタン秋田で開催した。

元支部長野口養吉先生、突然の訃報、緒先輩の御逝去に対し、全員で黙祷をささげた。

今年度の県支部総会案内は、「松琴会名簿 秋田県」平成24年7月20日発行版記載の191名に送付した。昨年度までは、案内送付希望調査、返信の有無等から50名程度への送付。郵送経費の負担増、参加者の減少固定、事務局の多忙等から、活動の弱体化が実態。今年度は、松琴会本部から「支部運営費」の助成を受け、全会員への送付とした。



秋田市「メトロポリタン」にて

助成金や繰越金の状況から、毎年通知したい。

出席者数を増やす手立てとしての191名全員宛発送だったが、返信ハガキ50、メール1、TEL2（計27.7%）。出席8名。返信無し114・宛先不明返送27。内容の改革が第一であろうが、卒業後の住所変更に対応できないものか、と。

年に一度、同窓の先輩、後輩が、過去に共有した時代と学びを語り、キヤリアデザインを考え、今を互いに感じとる、そんな時を過ごしたい。例年、8月第3または第5（大曲花火は第4）土曜日開催している。出席者 関谷都志子（大学35）・佐藤寛（大学38）・近藤和裕（大学41）三浦基（大学41）・奥山陽子（大学46）・鈴木隆博（大学54）・永井しおり（大学54）・工藤正隆（大学62）

◆東京都支部

支部長 井上 和男

東京スカイツリーと下町散策

東京支部では、支部会員の親睦をより一層深めるため今年度発足した、「女子会」の企画第一弾として、「東京スカイツリーと下町散策」を平成二十五年十月六日に実施し

た。参加者は三十七名で、大学から渡辺学長も参加した。出発は第一ホテル両国から。十一時四十分に集合し、開会式を行った。東京支部女子会代表の星野副支部長の司会進行で、井上支部長、渡辺学長の挨拶の後、昼食タイム。松花堂弁当を皆でいただき、スケジュールの説明の後、下町へとくり出した。まずは江戸東京博物館へ。五階六階の常設展示室に入り、自由行動。かなりの広さに圧倒された。江戸から東京に至る様子はかなりの見ごたえであった。見学終了後、記念撮影を行い、両国国技館の横を通り両国の水上バス乗り場へ。浅草二天門まで隅田川を船で行く。約十分の船旅となつた。天気はあいにく曇であつたが、東京スカイツリーがどんどん近くなるにつれ、皆のテンションも上がつていつた。浅草に到着後は、直接東京スカイツリーに行く者、浅草見学してからスカイツリーに向かう者とに分かれ、各自自由行動となつた。浅草から東武鉄道に乗つて一駅、



江戸東京博物館にて

### ◆支部報発行

東京支部報第五十四号 平成二十一年六月一日発行

・幅のある関係を築く 幹事長

片山聖英（五十期）

・支部総会・講演会・懇親会開催

案内

・青山忠一名誉教授とめぐる「浅

草文学散歩」実施報告

・二松人物列伝⑬ 上田桑鳩

（上）

・戦後の前衛書道運動の旗手

支部長 矢澤喜成（五十期） 副



一ヶルは藩主政宗の鷹狩の伝統の名を負う。粒粒辛苦の見事な霸權、震災復興への祈りとダブつた東北人らしい勝ちパターンを称賛。わが支部活動もあやかりたい。

## (2) エコノミック世相と文学

ケータイ・スマートフォンに目が奪われ、活字・文学・古典が軽遠され、若者の「○○活」等はすべて「エコノミック」が原理。文学部の現代的な意義は何か。松菴会は単に大学の同窓という縁だけならば先細りは当然である。文学は「愛読・教育・研究・創作」の分野に限定され、エコノミックとは迂遠な分野。限られた分野での効果的な活動を構築することは至難の業である。そんな中で宮城県支部会員の活動の一端をご紹介しよう。

## (3) 活躍の一端の紹介

教育現場の第一線で国語教師として頑張っている。現代文・作文・古文・漢文の国語の全領域の指導に強くて好評を得ている。また大学・高校等で研究者として活動している会員は多忙を極めている。犬飼公之(34回)の講演活動、また五十嵐伸治(44回)『東北文学辞典』勉誠社の執筆分担。執筆のために東北各地の文学を踏査して新たな発見が多くったという報告。阿部和夫(34回)の「百物語」をめぐる人々は、作者森鷗外から斎藤茂吉・小泉八雲・坪内逍

遙、そして恩師の飯塚友一郎教授に及ぶエピソードとして興味ある話題。創作活動として、書道分野での活動も目覚ましく、県高校書道研究会事務局長の栗山仁司(55回)を中心に田代ひとみ(44回)・佐々木なつき(74回)等の会員が各種書道展で活躍。また漢詩創作に千葉仁(27回)が各種の漢詩誌に投稿している。

参加者 犬飼公之・阿部和夫・五十嵐伸治・島倉尚子(66回)・千葉仁

◆道東分会総会

事務局長 山崎 郁紀  
平成25年度道東分会総会は、10月12日(土)釧路市栄町溶岩焼「こじやれ」にて開催されました。



度道南分会総会は、10月26日(土)函館市本町活魚料理「いか清」にて開催されました。今回は、前回会長の南部さんが7月に倒れリハビリ中のことで



◆道南分会総会

事務局長 山崎 郁紀  
平成25年度道南分会総会は、10月26日(土)函館市本町活魚料理「いか清」にて開催されました。

◆道東分会幹事会

真野清憲(60期)釧路・五十嵐猛(56期)釧路 道東分会幹事  
川谷文雄(39期)北見  
増井義昭(39期)札幌 支部長  
山崎郁紀(36期)札幌 事務局長

◆道東分会幹事会

事務局長 山崎 郁紀  
平成25年度道東分会幹事会は、「こじやれ」にて開催されました。

度道北分会総会は、10月26日(土)函館市本町活魚料理「いか清」にて開催されました。当日は悪天候で猛吹雪も心配される中、稚内から特急列車で2時間半かけて2名も参加してくれました。



◆道北分会総会

事務局長 山崎 郁紀  
平成25年度道北分会総会は、「てんゆう」にて開催されました。当日は悪天候で猛吹雪も心配される中、稚内から特急列車で2時間半かけて2名も参加してくれました。

旭川は北海道第2の都市だけあって人通りも多く、他都市のようなさびれた様子はうか

しましたが、開催数日前になつてようやく確保できたありさまで、帶広などから参加予定だった会員もホタルがとれず参加できない旨連絡が入つてました。

今回は久しぶりに根室から伊藤さんも参加され、北海道の農業や水産業など一次産業について話の花が咲きました。二次会は「つぶ焼専門店」となりました。

◆道東分会参加者

真野清憲(60期)釧路・五十嵐猛(56期)釧路 道東分会幹事  
川谷文雄(39期)北見  
増井義昭(39期)札幌 支部長  
山崎郁紀(36期)札幌 事務局長

◆道南分会参加者

吉川真理絵(60期)分会幹事) 吉川肇(59期)分会幹事)荒井到(51期)開原正信(39期)田島基義(38期)分会長)増井義昭(39期)支部長)山崎郁紀(36期)事務局長)

◆道東分会幹事会

吉川真理絵(60期)分会幹事) 吉川肇(59期)分会幹事)荒井到(51期)開原正信(39期)田島基義(38期)分会長)増井義昭(39期)支部長)山崎郁紀(36期)事務局長)

がわれず、日本海やオホーツクの海の幸、上川の山の幸に恵まれ、物価も安く（因みに一番参加費が安かつた）住みやすいところのようだ。久しぶりであり、当日始めて支部の会合に出席する人もあって、学生時代のことや各自の近況など二次会までの話は尽きませんでした。

〔道北分会参加者〕

佐々木伸（74期 種内）  
松林豪（59期 旭川分会幹事）

佐々木伸	(74期)	◆平成26年新年会
松林豪	(59期)	旭川
工藤昌彦	(56期)	分会幹事
増子優一	(56期)	旭川
吉野泰正	(55期)	稚内
湊邦夫	(43期)	滝川
増井義昭	(39期)	旭川
山崎郁紀	(36期)	札幌
山崎郁紀	支部長	事務局長
事務局長	山崎	郁紀
事務局長	山崎	郁紀
昨年の正月よりは少雪の1月9日		



## 札幌市「ラマダホテル」にて

でも支部の会合が行われました。それぞれの会合毎の参加人数はそれ程多くなくとも、年に5回も場所を変えて実施されていれば相当な数の参加人数になり、広大な北海道で同窓会活動としては今後もこの形で継続してゆきたいものです。

それにしても、74期以降の卒業生で北海道で生活をしている者の情報が全くといっていい程ないので、卒業式同志情報を得るようそれぞれ努力することを今年度の課題とすることにしました。

北海道支部会報 第四十七号 平成二十五年七月二十三日発行  
成部会員の異動 平成二十五年新年会報告  
北海道支部会報 第四十八号 平成二十五年十二月十日発行  
北海道支部総会 開催しました  
道東分会開催しました

◆支部報發行

永田哲之	(65期)	伊達市
富永貴之	(65期)	千歳市
若松顕仁	(56期)	千歳市
吉野泰正	(55期)	滝川市
花木弘	(49期)	松前町
不動和則	(43期)	恵庭市
増井義昭	(39期)	札幌市
山崎郁紀	(36期)	札幌市

ご挨拶をいたしました。会員の皆様から近況報告があり、和やかな雰囲気が流れております。例年比べ少人数ではありますが、大

## 藤沢市「きじま赤門」にて

・道南分会開催しました  
・道北分会開催しました  
・北海道支部平成二十六年新年会  
のお知らせ

## 神奈川県支部

新生活論文選集

平成26年1月12日(日) 藤沢のきじま赤門にて、平成26年松琴会神奈川県支部賀詞交歓会が開催されました。松琴会本部常任幹事助川忠弘様、二松學舎大学副学長山崎正伸様、東京支部長井上和男様、東京支部顧問木村正雄様をお迎えし、支部会員6名を含め、10名の参加となりました。支部長挨拶後、助川忠弘様、山崎正伸様、井上和男様より、ご挨拶をいただきました。乾杯後

学での学生生活の様子やお世話になつた先生方のエビソードに花が咲き、予定時間をするかにこえた賀詞交歎会となりました。新しかたちの、楽しい賀詞交歎会でした。ご来賓の皆様の形式張らない雰囲気作りと幹事・湘南地区長森田亨様のご配慮の賜と深く感謝申し上げます。時間が許す人々との二次会は正に自由発言の雨嵐。自然体の会でした。今後も、地支部との交流を深め、会

◆支部報發行

神奈川県支部報 第二十二号 平

成二十五年十月二十五日発行  
・第三十六回支部定期総会報告  
・平成二十五年度賀詞交歎会報告

・文学歴史探訪「鎌倉」（源頼朝ゆかりの道）

- ・ 歌手・水木昌平の新曲を手がけて 三十九回卒 保田陽子
- ・ 会員の近況 支部役員紹介

「神奈川文学散歩」発行  
会員八名のコラム紹介  
平成二十四年度決算報告  
二十五年度予算報告

## 群馬県支部

◆支部総会

支部長 新井喜義

度総会・新年会が、一月二十五日の土曜日に伊勢崎市の「プリオパレス」で開催されました。今回の出席者は、会員十五名、招待者二名、計十七名でした。

午後四時から始まつた総会では、

支部長挨拶に始まり、来賓の神津賢一郎会長がご挨拶の中で、先生が長野県佐久のご出身で、下仁田にある「神津牧場」との関わりや学生時代、帰郷の際、群馬をぬけて碓氷峠をアブト式機関車に揺られ故郷の駅舎に降りた話など、我々群馬県人としては大変興味あるお話を聞かせていただきました。(ちなみに、アブト式機関車が碓井峠から消えて四十年経ちます。)

また、総会の中の事業報告では、第二回を終えた「書展」について、今回も大勢の皆さんに鑑賞していただき好評であった旨の報告がありました。

総会後に行われた講演では、茨城県出身の岡野康幸氏(現在、群馬医療福祉)に、伊勢崎市「プリオパレス」にて



伊勢崎市「プリオパレス」にて

大学助教)が「中国で活躍した二松学舎の先人たち」と題してお話をくださいましたが、その中で、特に橋川時雄先生の中国での活躍と交流についての話題は面白く拝聴しました。

その後の新年会の席上では、出席者の近況報告が行われましたが、会員の皆さんがそれぞれの立場で活躍されていることを伺い二松学舎の力を感じました。

ただ、残念なのは、若い人たちの出席がないということです。今回も二十代、三十代の出席者は一人でした。また、国際政治経済学部の卒業生の出席者に関しては、ここ数年おりません。このあたりの問題は、他支部でもかかえているのではないかと思ひます。

ともあれ、平成二十六年も明けました。当支部も、会員相互の親睦を図りながら前進したいと思っておりたまです。

出席者  
中里昌之(36回) 新井喜義(37回)  
小保方康行(38回) 金井俊(38回)  
塚本忠男(40回) 須田章七郎(40回)  
高橋慶一(46回) 都丸弥生(47回)  
小石さち子(47回) 高柳薰(47回)  
松本茂治(49回) 金澤正教(50回)  
金田仁志(53回) 宮森庸子(56回)  
西牧秀敏(62回) 岡野康幸(茨城県)  
神津賢一郎(本部会長)

## ◆恒例の新年互礼会(総会)を開催

事務局長 齊藤衛

平成26年2月22日(土)、前段に支  
部長会議を行い、午後3時10分に大  
阪・千日前、鳥よし本店にて開会。数  
えて66回めの互礼会となる。11名の  
参会、来賓として、渡辺和則学長、小  
林公雄本部幹事長を迎へ、三重から  
伊藤淑子(38) 小林直紀(44)、兵庫  
から武内昭徳(47) 奈良から末吉榮  
三(12) 辻一(39) 大阪から西田清  
(35)、浦壁健三(44) 斎藤衛(49)  
そうして、元、奈良に所属され、今、  
千葉に在る山田勝久(34) の諸兄姉。  
(大阪) 土井良之、坂本昭仁(兵庫)

開宴に先超ち、今回の連絡で承つ  
た物故された方々への黙祷を奉げる。  
(大阪) 土井良之、坂本昭仁(兵庫)

木曾義孝、松本博(奈良) 平田勝  
通(三重) 山口良民の6名のご冥  
福を祈る。  
総合司会を斎藤衛が担当。開会の挨拶に立つた末吉代表は馬年に  
ちなむ「快馬は鞭影を



大阪市「鳥よし」にて

見るや正路につく」を引用して母校の創立137年、松菴会本部の83年、そして、松菴会近畿の66年の節目にはことにつけ、おりにふれて、この言葉の要諦から目をそらさずに、こ

こに燐然たる歴史が築かれてきた。この母校愛に母校二松学舎の明日がある、と結ぶ。渡辺学長から大学の近況、ことに、学舎・教育施設の九段への集約計画の進展、近くは靖国通りに4号館の建設着工と、それに呼応した学術研究の深化充実をはかっている。小林幹事長は若いころの松菴近畿との浅からぬご縁の話にはじまり、本部創設85年の記念事業は中味の濃い企画にと立案し、その成果に、総力を挙げている。また、二松學舎は明治以来、全国区の漢学塾、大学であるが、世情が地方からの志願が減少の傾向にあり、この課題に対するても思索をめぐらしている。近畿圏の多大の後援を望みたいと述べられて、乾杯の音頭をいただく。お一人おひとりの近況はどの方も二松学舎で学問を修めたお蔭が今の自分であるとの異口同音には天晴れな気持ちを抱いた。結びは近畿代表幹事の武内昭徳氏の言葉で午後6時10分に有終を飾る。

## ◆支部総会 埼玉県支部

◆支部総会

支部長 町田哲夫  
平成二十六年二月二十三日(日)

十二時三十分より、ラフレさいたま秋ヶ瀬庵（さいたま市新都心）において、平成二十五年度埼玉県支部総会・懇親会を開催しました。総会には、大学より渡辺和則学長、松菴会本部より神津賢一郎会長、東京都支部より星野優子副支部長のご臨席をいただきました。県内会員の参加者は十五名でした。関東地方は開催日の一週間前大雪に見舞われ、交通機関に大混乱が起きましたが、当日は穏やかな天候に恵まれ、学生時代の話題を中心に楽しい時を過ごすことができました。

総会では、今後の支部総会の開催についての方向を示し、参加者の合意が得られました。具体的には次年度の開催は秩父市、観光や文化財めぐり等を含めた企画を立案し、参加者の交流を深めることになりました。以後、県内各地の史跡・文化財めぐりや大学の協力を得て講演会活動等、事業性を重視した支部活動を開拓することが確認されました。

これを重ねることに増加している

## さいたま市「秋ヶ瀬庵」にて



十二時三十分より、ラフレさいたま秋ヶ瀬庵（さいたま市新都心）において、平成二十五年度埼玉県支部総会・懇親会を開催しました。総会には、大学より渡辺和則学長、松答会本部より神津賢一郎会長、東京都支部より星野優子副支部長のご臨席をいただきました。県内会員の参加者は十五名でした。関東地方は開催日の一週間前大雪に見舞われ、交通機関に大混乱が起こりましたが、当日は穏やかな天候に恵まれ、学生時代の話題を中心に楽しい時を過ごすことができました。

参加者数ですが、若い世代の加入増を含めて、個々の会員が情報提供に努め、今まで通り、人と人とのつながりから拡充を図ることになりました。また、大学の四号館の建設に併せ支部として母校への寄付を行うことが満場一致で決まりました。

懇親会では、参加者一人ひとりが近況を報告し、終始和やかな雰囲気で会を進めることができました。中でも、79回卒の駒井伸彦さんが埼玉県の教員採用試験に合格し、この四月から本採用教員としてスタートするという報告には、参加者から大きな声援が寄せられました。

渡辺和則（二松學舎大学学長）  
神津賢一郎（二松學舎松琴会会長）  
星野優子（松琴会東京都支部副支  
部長）

浅井 昭治(18回)	木村 誠次(39回)
持田 賢一(40回)	佐藤 修(41回)
福嶋 辰美(42回)	本田 和成(42回)
町田 哲夫(42回)	町田 芳子(42回)
八木 直也(42回)	柴田 京子(45回)
青木 一弥(47回)	吉野 昇之助(47回)
小西 明徳(60回)	中山 大輔(71回)
駒井 伸彦(79回)	

## 福岡県支部

支部長 永淵道彦

所持する唯一の展示室です。



筑紫野市「福岡二日市文学館」にて

新年の集いは午後一時から四時。まず二日市文学館二階の豊島与志雄小説童話展示室を閲覧する。豊島与志雄は福岡県出身、太宰治が師事し川端康成が兄事した文学者。生前の豊島の刊行

阿部誠文（三六回）、正生英彥（四八回）、井料洋美（五八回）、永淵道彦（三六回）。

人数の出席でした。当初、七人の希望が、急病者などあり、以下の四名の出席となりました。

一月二六日（日）、平成二五年度の支部会（新年会）を筑紫野市二日市中央三丁目（二日市中央商店街）の福岡二日市文学館で行ないました。二日市文学館は太宰府天満宮の玄関というべきJR二日市駅より徒歩5分、西鉄二日市駅から同七分の至便の場所ですが、日取りも悪く、久しうぶりの支部会であつたことから、少

岩手県支部便り第五十三号 平成  
二十五年八月一日発行  
・総会・懇親会を終えて 支部長  
宮本義孝

岩手県支部便り第五十四号 平成  
二十六年二月八日発行  
一枚の葉書 支部長 宮本義孝  
覆刻岩手県支部旧会報 自一号  
至九号 平成二十一年十月三十  
日初版発行

平成二十四年八月十五日再版発行  
復刻版発行の理由を、「はじめ  
に」で宮本支部長が次のように

# 岩手県支部

## 支部報発行

岩手県支部便り第五十二号  
二十五年六月二十三日発行  
・最期の持てなし  
支部長 宮本

岩手県支部

「松琴会福岡」第十二号 平成二二

い行なおふと泣め

「行なはうと決り、教會（まへ）。

良かろうと申合わせ、次回はこの夏

人気の文部省は、八月丁旨が

主列の支那会はやはり、八月下旬が

ながら大いに盛り上がり、終宴までノツという間でした。

述べている。

「会報は、第九号をもつて途絶えてしまった。このように続行するには随分苦労していたようだが、内容、そのものは、支部の創成期に当たり、活動を何とか活発にしようという意欲を伴なつて、結構読み応えがある。また、それぞれの文章も朴訥ながら誠実であるし、加えて、これから支部の在りようを考える時にはいろいろとヒントが与えられそうである。おそらく松菴会に係わりのある人々、読んで感興をもよおすだろうと思われた。

ヒントが与えられそうである。おそらく松菴会に係わりのある人々、読んで感興をもよおすだろうと思われる。興味をもつて読みたいと思っても、今では手に入ることはむずかしいだろう。これが、これを覆刻して残そうと思い到了た理由である。(一部抜粋)

第一号 「松菴いわて」 昭和五十二年八月五日  
第二号 「岩手支部松菴會會報」 昭和五十三年十月三十一日  
第三号 「松菴いわて」 昭和五十五年九月二十日  
第四号 「二松學舍松菴會岩手縣支部報」 平成元年六月二十日  
第五・六号 「二松學舍松菴會岩手縣支部報」 平成三年三月三十日  
第七号 「二松學舍松菴會岩手縣支部報」 平成四年七月三十一日  
第八号 「二松學舍松菴會岩手縣支部報」 平成四年七月三十一日

支部報 平成六年七月三十一日  
第九号 「二松學舍松菴會岩手縣支部報」 平成七年七月三十一日  
連号保存版 平成二十五年十二月一日 発行

一 覚書き 東日本大震災のこ  
と(抜粋)  
二 東日本大震災罹災者の皆さ  
んに御支援を

三 東日本大震災松菴會岩手縣  
支部會員・安否報告

四 東日本大震災松菴會岩手縣  
支部會員・安否最終確認

五 松菴會岩手縣支部會員から  
の近況報告Ⅰ

六 二〇一一・三・一一 あの  
時のこと

七 松菴會岩手縣支部會員から  
の近況報告Ⅱ

八 「かわいキャンプ」に被災  
地支援活動の皆さんを訪ねて  
野和義氏  
九 八木澤商店取締役会長・河  
野和義氏  
「東日本大震災から一年が  
たつて」を聞く

## 長野県支部

◆支部報發行

長野県支部報 第二十四号 平成二  
十五年六月二十七日 発行  
・陽明学は知行合一 支部長 関

保典(三十五回)  
講演 学校法人二松學舍理事長  
水戸英則

・諏訪湖周辺を巡って  
(平林たい子記念館・赤彦記念  
館・今井邦子文学館ほか)  
・平成二十五年度文学散步 善光  
寺周辺を巡って

進学相談会 平成二十四年度  
会計報告  
長野県支部総会のお知らせ  
平成二十四年度長野県出身卒業生  
平成二十四年度業種別就職一覧  
平成二十五年度都道府県別志願  
者・入学者数 他

## 平成25年度 秀葉会(第38回卒同期会) 総会・懇親会

平成25年度秀葉会の総会・懇親会が、大学祭(創縁会)、ホームカミングデーにあわせて、11月2日(土)に於いて、14名の参加により、開催されました。総会では、議題として、①会則の一部改正について ②卒業45年、50年に向けた事業について ③その他 が審議されました。次いで懇親会に移り、沖縄から参加の金城健一さん(金城健一・金子廣志・越川幸代・小林公雄・小林憲二・酒井淳吉・田原迫俊朗・永井陵次・廣田克己・松浦紀子・吉岡富子)、ホームカミングデーのみの参加者。生垣しげ子・上田幸子・金尾妙子・小杉綱代が登壇し、ホームカミングデーにパンフレットを提供した。たつみ寛洋ホテル(象潟温泉)の近況報告



ホームカミングデーに参加した38回生

佐藤寛尚、平成26年度は、大学卒業後45年を迎えることになり、多くの会員の皆様の参加をお願いしたい。

の近況報告

学生時代の思い出等で、会の3時間が瞬く間に過ぎま

# 「日本ファンタジーノベル大賞」



「日本ファンタジーノベル大賞」を受賞した古谷田奈月さん（文学部72回卒）について紹介します。「日本ファンタジーノベル大賞」は読売新聞社東京本社と清水建設が主催し、新潮社が後援する文学賞で、大人も楽しめる新しいファンタジー文学の開拓と確立、そして力量ある新人作家の発掘と育成を目的に1989年に創設され、この25年間に酒見賢一、鈴木光司、畠中恵、仁木英之などの個性豊かな作家を輩出しています。選考委員からもこれからの人という評価がされており、今後の飛躍が期待されます。二松學舎大学入学の動機は将来の執筆生活を意識して日本文学を学ぶためということです。同窓生として誇らしく、心から祝福して今後のご活躍を祈りたいと思います。なお、「日本ファンタジーノベル大賞」は来年度から休止とのことです。

「第25回日本ファンタジーノベル大賞」の授賞式が平成25年12月2日に開催されました。授賞式前の本学広報課のインタビューには「物心ついた頃からものを書く仕事に就くことを考え、日本文學を学びたいと本学への進学を決めた」と答えています。卒業後もアル

バイトなどを続けながら書き続けてきたとのことです。ものを書くという将来を見据え、そのために学び、卒業後も書き続けてきた強い意志と生き方は受賞式のスピーチにも感じられます。インタビュアーは、古谷田さんはとてもきれいな方で、終始にこやかな表情の優しいオーラに包まれていたと言いました。それを書くということを「ここが私の戦う場所」と言い切る力強さも持ち合わせた魅力的な人との印象を語っています。

ひたむきに夢を追い続ける同窓生に熱い声援を送り、大きく羽ばたくよう、できる応援をしましょう。

なお、受賞作の『今年の贈り物』は『星の民のクリスマス』と改題され、平成25年11月22日に新潮社から発売さ

古谷田奈月さん（文学部72回卒）

されています。発売に際して作品は次のように紹介されています。

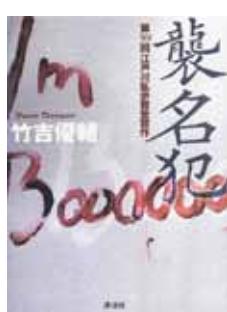
「つらい時、いつも傍らにあつた物語。もし、本当にその中で暮らせるなら」。

クリスマスイブの夜、最愛の娘が家出した。どこに？ 六年前父親が贈った童話の中に。娘を探すため、父は小説世界へと入り込む。しかしそが決定的に違っていた。人はどうして物語を読むのだろうか？ その答えがほんの少し見えてくる、残酷で愛に満ちたファンタステイックな冒險譚。」

## 『襲名犯』公開読書会開催！

江戸川乱歩賞を受賞した竹吉優輔さん（文学部71回卒）を

迎え、著書の『襲名犯』公開読書会が、3月29日（土）15時～17時702教室にて開催されます。



二松學舎大学文学部近文系ゼミナールでは、本学出身の作家竹吉優輔氏をお招きし、公開読書会を行います。チケットは、第 59 回江戸川乱歩賞受賞作『襲名犯』（講談社）および近作の『イーストウッドは助けにこない』（江戸川乱歩賞作家アンソリージ ディード・オア・アライア）講談社所収です。竹吉氏はこれまでの歩みや創作における想いをうかがいつつ、作品について自由に意見を交換する楽しいイベントです。参加費はなく、事前予約も不要です。ミステリー好きな方、作家になれたかと思っている方を始めとして、興味のある方はぜひ参加してください。

日 時：2014年3月29日（土）15:00～17:00  
ゲスト：竹吉優輔氏  
会 場：八段キャンパス1号館7階 702教室  
チケット：『襲名犯』（講談社）  
『イーストウッドは助けにこない』  
（ディード・オア・アライア）講談社所収  
※チケットは各自ご用意ください。どちらか一方でも結構です。  
問い合わせ先：[eduhonmonkyoumu@mail.econet.ne.jp](mailto:eduhonmonkyoumu@mail.econet.ne.jp)  
(山口直季)



# 卒業生の紹介



文学部国文学科卒業  
**加藤 達哉** (78回)  
警視庁久松警察署



国際政治経済学部国際政治経済学科卒業  
**富樫 さゆり** (政経19回)  
二松學舎大学附属高等学校

私は、大学時代に軟式野球部に所属していました。平日に公式戦があり、教員資格の取得を目指していたので、授業と部活を両立させるのは、とても大変でした。しかし、部活や学校生活を通じて人間関係、社会人になるための準備やマナーを教えていただき、そこで得た経験が様々な場面で大変役に立ちました。また、4年生になると就職活動や卒業に向

大学を卒業し、現在は二松學舎大学附属高等学校の事務室に勤務しています。大学を卒業してからの1年はあつという間で、卒業式に袴姿で友人たちと写真を撮り合ったことが、まだほんの少し前のことのように感じます。私は高校生の時にお世話になつた先生が二松学舎出身で、その先生の話す都心での生活や、学生時代の話に憧れを

てキャリアセンターへ連日足を運び、相談や企業説明会などの紹介をしていただきました。私は、卒業後、郵便事業株式会社に入社しました。そして茨城県のひたちなか支店に配属され、2年間、バイクで郵便物の配達を行ないました。初めての土地でありましたが、道順やお客様の顔、部屋などを全て記憶しました。夏の暑さ、冬の寒さ、雨の日や雪の日など大変な日もありましたが、配達の時はとても感謝され、それなりの充実感はありました。しかし、もつと人の役に立つ仕事をしたいという思いが募り、警視庁警察官を目指し、仕事後に勉強を重ね、採用試験に合格

抱き、二松學舎大学に入学しました。入学当初は初めてのことばかりで何もわからず、大学の事務の方に学校の近くの医者の場所を教えてもらうなど、とてもお世話になつた思い出があります。3年からは田端克至先輩のゼミに所属し、国際経済を学んでいました。ゼミの仲間達とはフェイスブックを使って課題の情報を交換し、プログラムを組んで経済情勢の計測にチャレンジするなど、新しく便利な物は取り入れながら課題を進めました。新しく取り入れたものに着いていけず、戸惑うこともあります。ですが、ゼミの仲間達からアドバイスをもらうなどして、大変ながら

も充実した毎日を送ることができます。私の学生生活は、人ととの出会いと支えがあつたからこそ充実していました。そのため、将来を考えたときに、今度は私が人を支え、将来をサポートしていく仕事がしたいと考えるようになりました。そして、現在は附属高等学校の事務室に勤務し、奨学金の申し込み手続きなどを行っています。自分の高校時代や、私自身の学生生活がとても楽しく充実したものであつたため、高校生の皆さんにも楽しい学校生活を送り、将来につなげていって欲しいと思いながら日々業務を行っています。

察学校で警察官になるための厳しい訓練や教養を受けましたが、親身となつて指導してくれた教官や助教、一緒に励まし合つた同期生との絆は、私の宝となつています。現在、私は、水天宮や明治座を管轄する久松警察署に配属となり、交番勤務員として日々悪戦苦闘しています。警察の仕事は、社会のあらゆることに関連しており、覚えることが沢山あります。しかし、もつと人の役に立つ仕事をしたいという思いが胸に秘め、都民の安全・安心のため全力で邁進したいと思います。

## 卒業生の活躍

卒業生がさまざまな分野で活躍しています。ここでは卒業生である松苓会員の活躍ぶり

端を紹介していきます。



左から上田さん・榎本さん・星さん・宮本さん（国立能楽堂 楽屋にて）

伝統を今に伝える能楽師として活躍する卒業生

二松學舎大学には、平成二十七年度に創立五十周年を迎える二松學舎大学狂言研究会があります。本学の卒業生である狂言大藏流の現宗家が設立し、同じく卒業生である大藏吉次郎師（40回卒）が設立時代から熱心なご指導をして下さるクラブです。毎年、狂言研究会では、国立能楽堂研修舞台で、本物の装束を着て演じる本格的な狂言公演『自演会』を行っています。その舞台は、現役の学生から様々な世代の卒業生までが参加しており、本学に関わる卒業生や学生、保護者の方々のみならず、あ

ちに人気となっています。この大藏吉次郎師のもと、本学の卒業生で狂言研究会OBの、宮本昇さん（59回卒）、星廣介さん（61回卒）、榎本元さん（63回卒）の三人がプロとして、上田圭輔さん（78回卒）がプロ見習いとして活躍しています。

るきつかけからお越しください、ずっと楽しみに通ってくださる根強いお客様もいらっしゃるそうです。また、舞台には参加しなくとも、当日々元気なお顔を見せてくださるOGで楽屋もより華やかになります。

の舞台で活躍されています。また、能樂界でも将来を期待されている一人です。星廣介さんは飘々としたあたたかみのある雰囲気が好評です。榎本元さんは、平成二十一年に『三番三』を披きました。その爽やかな芸がとても人気です。

上田圭輔さんは、今年入門四年目を迎える一番の若手です。現在、一

生懸命修行中ですが、上田さんの人柄は人を惹きつけ、出身の熊谷では、地元をあげて応援してくれています。舞台で活躍する卒業生たち。同じ学舎で学んだ先輩、後輩がしつかり日本の伝統芸能を受け継ぎ、守つている姿。同じ卒業生として、何だか嬉しく誇りに思えます。

この春、ぜひ同じ仲間の活躍を能楽堂へ見に行つてみませんか。

斎須博（文五十七回卒）さんが、平成二十五年十一月一日の読売新聞茨城版の「常陸人」に、アマチュア落語家として紹介されました。今後の活躍も期待されます。

「上毛かるた」と浦野匡彦  
—群馬文化協会が県に無償譲渡

松菴会常任幹事・群馬県支部長の新井喜義氏(37回卒)から、「朝日ぐ

「台内村鑑三」「つる舞う形の群馬県」「裾野は遠し赤城山」など群馬県の名

今昔  
考二、(5回至  
(旧姓 石井

『んま』紙（朝日新聞姉妹紙 2013年11月22日号）が、1月開催の常

勝史蹟、歴史的・人物などが詠まれて  
いる。

浦野匡彦元理事長・学長が、誕生にかかわった『止毛かるた』。そのかる

直隸省立農業大學に就学し、日本で農業技術を学んだ。1927年（昭和2年）に日本へ留学し、満州國官吏を経て帰国した浦野氏は、結成間もない恩賜財團

たを守り続けてきた財団法人「群馬文化協会」（初代理事長は浦野匡彦。現理事長西片恭子氏、浦野氏長女）が、商標権や著作権などを群馬県に無償譲渡されたという記事。「上毛かるた」生みの親である浦野匡彦は、二松學舎専門学校第2回卒（昭和7年3月）。

同胞援護会群馬支部の常任幹事に就任。戦火で荒廃した郷土を目の当たりにして、「夢を失った子どもたちに明るく楽しく希望の持てるものを作ろう」と、郷土の名勝旧蹟や歴史的人物を紹介、愛郷心の発揚を目的に、昭和22年に制作された。

た」制作に至る経緯から、現在にいたる「上毛かるた」の歩みを記している。なお、「群馬文化協会」理事長の西片恭子氏には、2002年6月刊行の『上毛かるたのこころ—浦野匡彦の半生』（中央公論事業出版）がある。

『朝日ぐんま』紙  
『上毛かるたのこころ—浦野匡彦の  
半生』(西片恭子著)

そしてこの度、公益財団法人日本書道教育学会主催の第六十三回書道學會展に於いて、文部科学大臣賞を

後輩たちの心に稱つた生き方を見聞  
きする度に大きな勇気を頂いていま  
す。私も自分の号に恥じない生き方  
をするべく身が引き締まります。

ここに改めてお世話になつた二松  
學舎大学に感謝すると共に、松琴会  
のますますのご発展をお祈り申し上  
げます。

後輩たちの心に稱つた生き方を見聞  
きする度に大きな勇気を頂いていま  
す。私も自分の号に恥じない生き方  
をするべく身が引き締まります。

ここに改めてお世話になつた二松  
學舎大学に感謝すると共に、松琴会  
のますますのご発展をお祈り申し上  
げます。

九段下の駅から地上に出て、武道館の入り口の「書初展」の文字を目にすると、重たい書道具を持って大学まで向かつたことを懐かしく思い出します。二松學舎大学在学中は陶淵明の研究を行う傍ら、書道を専攻し、書道部にも所属しておりました。大学の書道科には多くの先生がいらっしゃいましたので、流派を超えた書を学ぶことができました。伝統書道を重んじる授業は基礎基本でしたが、永遠のテーマでもありました。

受賞しました。作品は全紙二枚継ぎの大きさで、張即之の「李伯嘉墓誌銘」千二百字の臨書です。定められた紙面に原帖の品致を表現するための、行数・字間・文字規格・野線の太さ・墨色などに試行錯誤を繰り返しながらの制作となりました。

第63回書道學會展

文部科学大臣賞受賞!!



## 学生の各賞受賞一覧（平成25年度）

### ○個人

大会名	受賞内容	氏名
第98回全国学生書教展	特別優秀賞	原 義治
第98回全国学生書教展	文部科学大臣奨励賞（大学の部）	武内 すず
第42回全書芸展	東京都知事賞	武内 すず
第98回全国学生書教展	文部科学大臣奨励賞（一般の部）	佐藤 優弘
第98回全国学生書教展	中国大使館賞	真家 朋華
第98回全国学生書教展	審査委員長賞	竹下 友崇
第98回全国学生書教展	審査委員長賞	倉持 実季
第98回全国学生書教展	審査委員長賞	長谷 晏里
第18回全日本高校・大学生書道展賞	全日本高校・大学生書道展賞	長谷 晏里
第18回全日本高校・大学生書道展	全日本高校・大学生書道展賞	田村 里奈
第42回全書芸展	秀逸	田村 里奈
第7回全日本学生・ジュニア短歌大会	東京都教育委員会賞	泉水 咲穂
第7回全日本学生・ジュニア短歌大会	秋葉四郎選者賞	尾竹 結喜
第7回全日本学生・ジュニア短歌大会	秀作賞	吉田 直生
第7回全日本学生・ジュニア短歌大会	秀作賞	安藤 武礼
第7回全日本学生・ジュニア短歌大会	秀作賞	高嶋 美咲
第7回全日本学生・ジュニア短歌大会	秀作賞	深沢美早季
第57回千葉県短歌大会（学生の部）	天賞	中島 萌
第57回千葉県短歌大会（学生の部）	地賞	松井 秀之
第57回千葉県短歌大会（学生の部）	優良賞	新藤 果林
第65回毎日書道展	漢字部I類入選	大野 純奈
第65回毎日書道展	漢字部II類入選	伊藤 華子
第30回読売書法展	入選	沖田 真耶
第30回読売書法展	入選	駒形 優香
第30回読売書法展	入選	櫻井 美緒
第30回読売書法展	入選	藤松 理恵
第30回読売書法展	入選	松澤 柚香
第30回読売書法展	入選	山田 優果
第42回全書芸展	秀逸	中川 清楓
第42回全書芸展	秀逸	奥平 真惟
第42回全書芸展	優作	藤木 実樹
第42回全書芸展	入選	荒木 義司
第42回全書芸展	入選	酒井 麻衣
第42回全書芸展	入選	内田 智也

### ○団体

大会名	受賞内容	団体名
第98回全国学生書教展	団体優秀賞	書道部

## 活躍する学生諸君

学生生活において「何か」に情熱をそそぎ、その思い出が今もなお鮮明に蘇る方は沢山おられることと思います。

本号では、現役学生諸君の様々な

分野での活躍をお伝えします。

掲載の表は、本学学生が本年度受賞した賞の一部です。受賞の多くが書道展ということは、本学の面目躍如、まさに「老家芸」といったところでしょう。学生諸君の日々墨に塗れながらの真剣な創作活動を垣間見ますと、各書道展での高評価は納得の感があります。

短歌の分野での活躍も目を引きます。学生ならではの情熱と感性、そして文学を追求できる芳醇な環境が、

優秀な作品を生み出しているのでは、と推察します。

また、学部の学生のみならず、大學生でも優秀な研究によって、高额な研究費を贈呈されたとの報告もあります。

例年ですと、剣道・駅道やスキーノード武道・スポーツ系での受賞も報告されていますが、現時点ではまだ無いようです。次年度の活躍に期待したいと思います。

二松學舎大学の平成二十六年度地方説明会の開催日程（予定）が決定しました。この説明会には、大学から学長はじめ関係者が出席し、大学の現況等の説明も行われます。

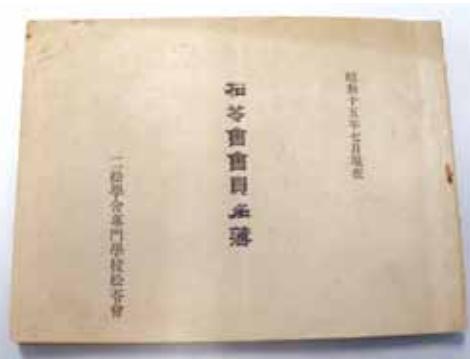
開催案内は、開催道府県の高校を対象に送付されます。が、同窓生にとつても母校の最新の情報を知るよい機会となります。大学関係者との懇談や支部会員相互の交流の場とすることもできますので、奮ってご参加ください。

## 平成二十六年度 地方大学説明会開催日程

開催都市名	開催予定日	会 場
岩手県・盛岡市	平成26年6月21日(土)	ホテル東日本
福岡県・福岡市	平成26年6月21日(土)	西鉄グランドホテル
長野県・長野市	平成26年6月28日(土)	ホテルサンルート長野
高知県・高知市	平成26年6月28日(土)	高知サンライズホテル
長野県・松本市	平成26年7月19日(土)	松本東急イン
愛知県・名古屋市	平成26年7月26日(土)	名古屋栄東急イン
広島県・広島市	平成26年7月26日(土)	広島グランドインテリジェントホテル

※説明会は、午後に実施されます。日程・会場等は予定ですので変更や中止の場合もあります。詳細は、松苓会本部までお問い合わせください。

# 松苓会の歩み(2)



昭和15年7月現在松苓会会員名簿

前号発行後に古書店から昭和15年7月現在の『松苓会会員名簿』を入手した。今回は最初に、今回入手した昭和15年版の会員名簿をもとに当時の松苓会の様子を探り、続いて昭和18年4月から専門学校校長となる那智佐伝第2代会長の『松苓』に題する辞を、そして学徒出陣にも触れたい。

## 昭和15年の『松苓会会員名簿』

本紙前方に写真掲載の昭和17年7月の『松苓会会員名簿』報国団団員名簿の編集後記に「名簿を出すようになつてから4年目になります。目次は、次のとおり。

索引（正会員、物故会員）、会則、松苓会役員（会長、副会長、顧問、幹事、委員）、賛助会員、正会員、転居・転職・改姓届用紙

今回入手の『昭和15年7月現在松苓会会員名簿』は、タテ11cmヨコ15cm全64頁からなり、専門学校在学生の組織である「松友会会員名簿」を併載している。奥付には発行日（昭和15年7月3日）、編集兼発行人として「二松學舎専門学校松苓会右代表 石川梅次郎」の名前が記載されている。

す・・・とあることから、昭和13年ごろから、機関誌『松苓』のほかに名簿を単独に発行したものと思われる。機関誌『松苓』では、現在のところ、第4号（昭和10年6月20日発行）までは会員名簿を掲載していることが確認できる。

今回入手の『昭和15年7月現在松苓会会員名簿』は、タテ11cmヨコ15cm全64頁からなり、専門学校在学生の組織である「松友会会員名簿」を併載している。奥付には発行日（昭和15年7月3日）、編集兼発行人として「二松學舎専門学校松苓会右代表 石川梅次郎」の名前が記載されている。

正会員として第1回（昭和6年卒）から第10回（昭和14年卒）までが掲載されている。卷末の編集後記に「卒業生の累計は七百二十九名です。（内死亡四十三名）」とある。「名簿係七・卒 大堀」とあり、委員で幹事の大堀恒之氏が編集等を担当されたことがわかる。

正会員として第1回（昭和6年卒）から第10回（昭和14年卒）までが掲載されている。卷末の編集後記に「卒業生の累計は七百二十九名です。（内死亡四十三名）」とある。「名簿係七・卒 大堀」とあり、委員で幹事の大堀恒之氏が編集等を担当されたことがわかる。

分以上納入スベシ其ノ現金ハ母校会計係ニ取扱ヲ託ス」が昭和14年「会費ハ金六円トシ全額ヲ納入シタルモノハ終身会員トス其ノ現金ハ母校会計係ニ取扱ヲ託ス（但シ納入方法ハ母校卒業年度ニ於テ全額ヲ月賦前納スルモノトス）」となつております。終身会費制度を設けている。

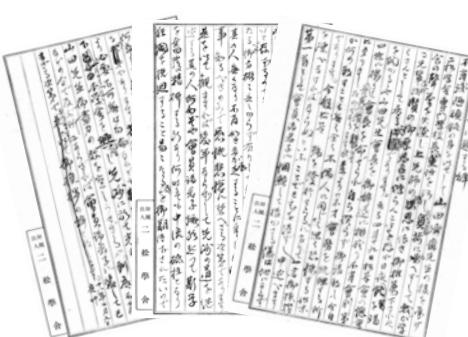
当時の松苓会役員は、会長 山田準、副会長 那智佐典。顧問に国分三亥、佐倉孫三、小豆澤英男、橋純一、今 欣吾の名前がみえる。賛助会員には、現職の教職員の名前が掲載されている。

不肖浅陋頑鈍の身を以てして山田濟斎先生の後を承け二松學舎専門學校長の重任を汚したる處負荷に任へずして我が學舎の聲譽を失墜し上先師の鴻恩に倍き御推薦下されたる先輩及び諸賢の御恩召に悖らんことを恐れ日夜驚鈍を竭くさんとして居る状態であります。去る四月二九日松苓会の総会を開かるるや山田先生会長を御辞退に相成り不肖会則第四条に拠りて亦た其の後を襲うて会長を命ぜられ自ら揆らず御請致し今日に至りましたのであります。が素よりの不才会務を統理する所か何の致すことも無く全く木偶人に同じく深く恐怖する始末であります。今

専門学校初代校長の山田準先生が、昭和18年3月を以て校長を辞任され郷里の岡山県に帰られる。その後を継いだのが那智佐伝先生である。この間の事情は、『二松學舎百年史』に詳しく述べている。会則により松苓会に2代会長に那智先生が就任した。

松苓に題する辞

那智 佐伝



那智先生の「松苓に題する辞」原稿



山田準校長辞任帰郷送別会（昭和18年3月）前列左から3人目国分理事長、4人目山田準校長、5人目那智左伝次期校長（『二松學舍百十年史』より）

般松苓<sup>(注)</sup>号を発行せらるるに方りて御挨拶を陳べなければならぬといふことで已むを得ず一言申述べます。第一首として会員諸君子に憇願して措かざる儀は他にあらず第六条に明示さるる通り本校事業の得失に関し御遠慮なく御意見を具陳されんことを切望致します。頑陋の至りなれども諸君の御高見を容る点だけは決して吝ならずと信じますから当局者と謀り出来得る事ならば必ず之を実行致し度いと存ずるのであります。次に先師高足の弟子本校に主席たるべき御方彬々乏しからず有りしが如今多くは物故凋落幾と其の人無くなり不肖如き者が承乏することに至りしは所謂時事知る

べきのみで感慨悲愴に禁へざる次第であります。是を以て觀ますれば幾年ならずして先師の道を繼述する其の人何如ぞや会員諸君子蹶然起つて斯学を奮發精研する所あり何時にても中流の砥柱となり狂瀾を挽回すること易々たる底を御期待下されたいのであります。側に承れば山田先生の命名の後凋会あり己に業に国学なり漢学なり真に先師の後勁となり正誼明道を以て任せらるる御方之れあるべしと思ふが何卒して嶄然頭角を見はされたること懇希に禁へざるのであります。茯苓となり世敝を医せらるる人材固より必要不可無は勿論なれども斯学第一人者として天下一ありて二なき本学舎を興隆し先師に於て光あるやう又山田先生御尽力の効を空しうせざるやう到底不肖などの企て及ぶ所にあらざれば会員諸君子に幾して已まざる次第であります。

十八年七月九日  
夜岬

<sup>(注)</sup>号数は空欄になつてゐる。

この那智先生の題辭は、機關誌『松苓』第10号に掲載されたものと思われるが、第10号は大学に保存されておらず、掲載誌は見ていない。原稿から起したものである。

文中の「後凋会」とは、昭和16年9月に発会した二松學舍専門学校を資金面から後援する組織。

## 学徒出陣

昭和18年10月15日付の文部省体育局長から発せられた公文書「出陣学徒壮行会開催に関する件」が大学に残つてゐる。壮行会要綱には、目的、主催、実施日時、参加範囲、服装、標識、隊の編成、式次第など15項目にわたつて詳細に記されている。二松學舎専門学校から何人参加されたかは記録がなく、不明である。

昭和18年10月21日に在籍していた生徒は、専門学校第16回生が1年生、第15回生が2年生である。3年生（第14回生）は、すでに繰り上げ卒業でその年の9月に学窓を後にしている。卒業後50年を経た卒業生の回想録として発行されている『茯苓』の第9号（平成19年8月1日発行）には、第13回卒から第20回までの卒業生の回想が収められている。戦時下での軍事教練、勤労動員や学徒出陣などに触れてゐるが、出陣学徒壮行会については、15回卒の岩本邦夫（前香川県支部長）の記録がある。

私達は勉強の傍ら、勤労奉仕にも参加いたしました。築地の砲台設置作業の手伝い、又横浜豊田自台



昭和17年7月 北富士陸軍廠舎

動車工場での部品作り作業。そして、戦時体制は益々きびしく、私達学生も遂に戦場に行く事になり、昭和18年の暮、神宮外苑で盛大な出陣学徒の壮行会が行われ、その時に私は校旗をもつて、先頭で行進をいたしました。終了後神宮を行に、歓呼の声に送られながら市内を行進し学校に、そして暮には夫々故郷に帰つて行つた。

同じく15回生で松苓会顧問の佐佐木鍾三郎（元理事長）は、松苓会報第7号（平成5年7月10日発行）に「学徒出陣から半世紀」と題して次のように記している。

さて、17年入学の第15回生が二年生の秋、各大学高専学生による、神宮競技場・井の頭公園往復35糠



出陣学徒壮行会の公文書

第14回生の荻昌弘は、『二松學舎百年史』に次のように記している。那智先生の訓示は、何人の同期生が記している。

第16回生の荻昌弘は、『二松學舎百年史』に次のように記している。

私は、昭和十八年四月、二松學舎専門学校へ入学し、昭和二十年に卒業した。(中略) その年、初秋、突然、文科系学生への徴兵猶予が、停止された。朝刊でその文字を目にしたときの私(たち)の衝撃率直にうちあけてしまえば、ああ、

の武装競争があり、本学からも1組(10名)が参加したが、「從来この種の競技には参加しなかつた二松學舎も今回は出場」と各新聞に報道された。

18年9月、第14回生の練上げ卒業の後、東條内閣により文科系学生の徴兵猶予制度が廃止され、大正12年11月までのうまれの一、二年生は徴兵検査を受け、合格した者は、指定された各部隊に、12月1日、それぞれ入営した。

この直前に、学徒出陣壮行式とて神宮競技場で雨中の分列行進が実施され、残されていたフィルムは今もときどき映されるが、多く

の人が、出陣学徒全員が参加したと思込んでいた。そんなことがあらはずも無く、出席したのは一部の者にすぎない。

入隊のため学窓を離れる学生の中には、当時のことだから「死んで帰ります」とか、「靖国神社でいましょう」と挨拶のことばを述べる者もいたが日頃温厚な二松學舎学長兼旧制専門學校長の先師惇斎那智佐典(よしのり)先生は極めて強い調子で、「そういうことを言つてはいけない。死なずに必ず生きて帰りなさい」と言つた。これにつられたように、配属将校の飯尾中佐も「いま陸軍の中には大陸で悪いことをしている連中もいるが諸君はその真似をしてはいけない」と強調した。これらのことに入つたら、ただでは済まなかつたろう。母校はやはり眞の中庸と自由を標榜する学校であつたのだ。



入営送別会 如水舎にて 昭和18年10月

**資料提供のお願い**

二松學舎松苓会史編纂のための資料を収集しています。特に次の資料をお持ちの方は、ご一報ください。

- ・機関誌『松苓』創刊号、第5号、第6号、第7号、第8号、第10号以降の号
- ・松苓会名簿 昭和13年以降昭和30年代までに発行されたもの
- ・松苓会会則資料
- ・松苓会活動(本部)に関する資料、支部活動に関する資料(支部報など)、同期会、クラブ等のOB会などの写真、専門学校時代、昭和20年、30年代の写真、卒業アルバムなど

つきよくは明日発つ身であった。  
(中略) 私たち一年生は、間もなく、教室の授業が全部閉鎖され、全員そのまま、赤羽にある日産化学の大工場へ、勤労動員という名で、労働者としての通勤をはじめる。

本学の卒業生ではないが、多田実元(実業家)は、平成5年8月、「何も語らなかつた青春―学徒出陣五十年、歴史を創つたわだつみの若者たち」(三笠書房)を著わしている。

小林公雄(38回)記

## 松苓会支部長名簿

平成 26 年 3 月 1 日現在

支 部

氏 名

卒回

北海道 森 手 城 田 形 島 城 木 馬 玉 葉 京 川 梨 野 潤 山 川 井 阜 岡 知 重 賀 都 阪 庫 良 山 取 根 山 島 口 島 川 媛 知 岡 賀 嶋 本 分 嶋 嵐 島 繩

昭三	孝仁	基裕	博隼	進義	夫一	男治	介典	作雄	也宏	人次	守嗣	暢男	道德一	隆公	仁敬	郎嗣	子美	達生	彥寬	郎文	忍幸	昭一
義捷	義	捷義	博	隼進	義夫	一男	治介	典作	雄也	宏人	次守	嗣暢	男道德	一隆	公仁	敬郎	嗣子	美達	生彥	寬郎	文忍幸	昭一
増目	宮千	三齋	北那	寺新	町辻	井平	板関	坂小	菅中	竹永	新稻	角廣	浅武	辻明	小江	小平	俵大	大上	坂永	吉黑	塩加	宮岡金
山福	茨栢	群埼	千東	神奈	新富	石福	岐静	愛三	滋京	京大	兵奈	和鳥島	廣山	山德	香愛	高福	佐長	熊大	宮鹿	児島	沖	

## 松苓会役員名簿

平成 26 年 3 月 1 日現在

氏 名

卒回

顧問	佐古	純一郎	11
ク	佐木	鍾三郎	15
ク	雨海	博洋	19
ク	末吉	三則	12
相談役	戸辺	榮英	
ク	渡	和和	
本部役員	(17名)	事務局 (1名)	
会長	津地	事務局 (1名)	
副会長	田林木	賢一郎	27
幹事長	葉井島	雄己	38
監事	林野上	雄治	38
常任幹事	河柳原橋	絵仁	37
ク	千新手	二治	41
ク	小平井	男春	27
ク	神高	雄博	37
ク	菅高	子弘	38
ク	助佐	修	40
事務局	(15名)		
幹事	北海道		
北海	形城庫		
東	口川分繩城		
近	葉葉京城		
中	葉玉		
四	道		
九	北海		
沖	形城庫		
	葉葉京城		
	葉玉		

幹事	北海道	山齋那	紀裕隼德
道	形城庫	武俵大	集德嗣美
北	口川分繩城	加金芹	忍一世男明
東	葉葉京城	岡小齋	一士孝德
近	葉玉	西志小	明
中	道	嶋藤花	郁昭
四	北海	内田西茂	賢邦
九	形城庫	城川村町	健哲
沖	葉葉京城	藤園村西	幸邦祐隆

